

◎共通教材ノート

ベートーベン作曲

トルコ行進曲……………渡邊學而

——「トルコ行進曲」流行の背景——

18世紀から19世紀初頭にかけて、ヨーロッパでは、「トルコ行進曲」をはじめとするトルコ風の音楽が流行したが、その源泉はトルコの近衛兵の軍楽隊であったことは、よく知られている。

1299年にオスマン・トルコが建国されて間もなくの14世紀中葉に、トルコ皇帝付きの軍楽隊が組織されたというが、その時にはトルコで古くから使われていたズルナ (zurna) というトランペットのような管楽器と、ダブル (davul) という大太鼓が中心であった。しかし、その後オスマン・トルコが国力を増大し、皇帝の権力が大きくなるにつれて、使われる楽器の種類も増え、人数も多くなってきている。たとえば、17世紀初頭にアゴスティーノ・タッシという人の描いたデッサン風の絵(現在ロンドン英国博物館所蔵)には、ズルナとダブルのほかに、一対になった小型ケトル・ドラム(腰に付けて叩く)、シンバル、トライアングルの奏者がみられる。

また18世紀初頭、アーメド三世(在位1703～1730)のために描かれたトルコ近衛兵軍楽隊行進の図(現在イスタンブールの博物館所蔵)には、前列に8人のダブル奏者、第2列に6人のシンバル奏者、後列に6人のズルナ奏者(ズルナといっ

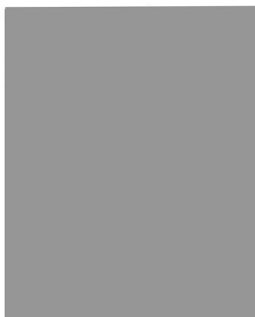
てもかなり無弁トランペットに近い)がいずれも馬に乗って行進し、その脇に3人のティンパニ奏者が一対ずつラクダに乗って演奏しているようすが、見事に描かれている。

このようにトルコの軍楽隊は、大太鼓、大・小のティンパニ、シンバル、トライアングルといった打楽器を中心にして、それにピッコロのような笛とトランペット系の管楽器を加えた編成が一般的なものになっていた。

*

それでは、そうしたトルコの軍楽隊の音楽がどうしてヨーロッパで流行するようになったのであろうか。それにはヨーロッパとトルコとの歴史的な関係を見みる必要がある。

1299年に建国したオスマン・トルコは、マホメット二世(在位1451～1481)の時代に西方に大きく勢力を伸ばし、1453年にはコンスタンティノープルを攻め落として東ローマ帝国を滅亡させた。またスレイマン一世(在位1520～1566)の時代には、その国土は、現在のハンガリーからユーゴスラビア、またアフリカ北部のアルジェリアにまで達し、この時オーストリアのウィーンを攻撃している。そし



てこれ以後17～18世紀を通じて、トルコはたびたびオーストリアおよびロシアと戦うことになった。

このうちオーストリアは、歴史的にみても、また地理的にみても、常にトルコ軍のヨーロッパ侵入の防波堤的な役割を果たしていたから、そうした意味でトルコとの接触がもっとも強かったといえる。そして1687年にトルコ軍の侵略を受けた時、ドイツ諸侯の助けを借りてこれを撃破してからは、両国の関係はかなり平穏な時期を迎えている。

このようにして18世紀に入ると、ヨーロッパの国々にトルコ軍楽隊の独特な音楽に対する好奇心が生まれてきた。そのきっかけになったのは、ウィーンに新しく駐在してくるトルコ大使や通商代表者といった高官たちが、自分たちの存在を誇示するために、トルコ軍楽隊のパレード付きでウィーンに入城したことによるといわれる。

またそうした折の18世紀初めに、トルコ皇帝がポーランド王アウグストゥス二世に、トルコの軍楽隊を贈っている。そのためにその後ロシア、オーストリア、プロシヤなどに同じようなトルコ音楽家による楽隊が雇われるようになり、その音楽がヨーロッパ各地に流行したと考え

られている。

*

その中心となったのが、やはり何といってもオーストリアであり、とくにその主都ウィーンであった。だから作品の中にこうしたトルコの軍楽隊の音楽を取り入れたものを書いているのも、オーストリアの作曲家が圧倒的に多い。たとえば、グルックのオペラ「アルチェステ」やハイドンのオペラ「薬剤師」、「突然の出遣い」、あるいは交響曲第100番「軍隊」にもみられるし、モーツァルトの作品では、オペラ「後宮からの誘拐」、ピアノ・ソナタ「トルコ行進曲付き」、それにバイオリン協奏曲第五番「トルコ風」などをあげることができる。

ベートーベンの劇音楽「アテネの廃墟」の中の、「トルコ行進曲」も、まさにそうした種類の音楽の一つだし、ベートーベンはこのほかにも、有名な交響曲第九番「合唱付き」の最終楽章にトルコ風の音楽のもつ打楽器の効果を取り入れ、「行進曲風に」と記している。

〔音楽評論家〕